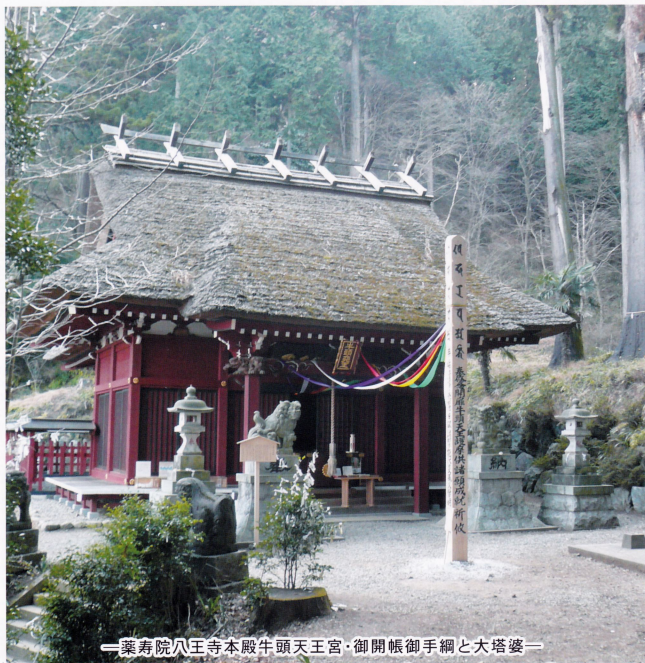


飯能のうら

第29号



—薬寿院八王寺本殿牛頭天王宮・御開帳御手綱と大塔婆—

目次

- ◆十二年に一度 本尊牛頭天王丑歳大開帳
.....坂口和子 2
- ◆飯能地方のわらべうた.....深堀道義 2
- ◆郷土史研究会八月例会報告 小江戸佐原めぐり
.....浅見初枝 2
- ◆飯能の山車・屋台 —その構造と来歴—
.....小槻成克 3
- ◆私が体験した「昭和初期の飯能市街地」...加藤義雄 4
- ◆「太平洋横断・来本土を目指した「気球」の話」
.....新井五助 5
- ◆随筆 桐の下駄.....大野悦子 7
- ◆随筆 白いかっぽう着.....田嶋和子 7
- ◆随筆 家族で百人一首.....吉田敏子 7

表紙によせて

十二年に一度

本尊牛頭天王丑歳大開帳

坂口和子

私たちの住む飯能市には山岳信仰の寺として崇えた三つの名刹があります。高山には真言宗高貴山堂薬院(通称高山不動)、南子ノ山に天台宗大辨山雲洞院天龍寺(通称子ノ権現)、同じく南八王寺に天台宗匡王山薬師院八王寺(通称竹寺)があり、古くから親しまれています。

なかでも竹寺は、神仏混淆の姿を今に残す東日本唯一の遺構として特異な存在であります。

神仏混淆とは神様と仏様が一緒に祀られている古い形を云いますが、明治維新の神仏分離政策からまぬがれて、ご本尊(本地仏)が仏教の華師如来であるの一方では牛頭天王(八坂神社と同系の神、スサノオノミコト)宮があり、ご本尊として牛頭天王が祀られていることになりました。寺院ですが鳥居も建てられているということになります。

牛頭天王は奉宮である八人の童子を従え、牛頭天王宮に鎮座されていますが、ご開帳は十二年に一度の丑歳の年に行われます。その年が平成二十一年に当たりますので竹寺では四月十九日に春季特別大祭を厳修いたします。

ご本尊の手と本殿前の大塔婆につながれた五色の綱に触れることで特

別な吉縁が結ばれるということですが、牛頭天王はインド祇園精舎の守護神といわれ、中国を通過して日本に伝わったとされています。さらに日本において陰陽道と関わりを深め、また蘇民将来伝説とも結びつき、スサノオとも同体とされる不思議な尊像です。

竹寺の縁起は古く「天安元年丑年、慈覚大師御巡修の折、疫病流行し患者の多きを憐れみて、当山を道場として大護摩の秘法を修し、一切の障難を除き、疫病を降伏し病患を除かしめん事を誓い、一刀三礼して尊像を造り、世の人を救い後世に残し給へり……」とあり、以来東国霊場として、また山岳信仰の道場として千年余の歴史を有する貴重な存在です。境内には聖観世音菩薩を祀る観音堂があり、武蔵野霊場の三十三番結願寺ともなっています。

四季の変化に富み、「奥武蔵俳句寺」と称されるように、俳人等の絵馬句碑などが数多く残され、また竹寺の精進料理も趣きを添えています。飯能市の宝として山岳信仰に裏付けられた三つの寺院を大切にしたいものです。

飯能地方のわらべうた

深堀道義

十年ほど前に、この飯能地方では

江戸期以来どんなわらべうたが歌われていたのかを調べてみようと思っただ事があった。平成十四年度の飯能市地域づくり事業の認定を得、古の方々と小中学校の音楽教師であった方を頼りまして調査し、三十三曲を採り上げ、飯能地方のわらべうたと称するビデオテープを作成した。

飯能市史誌などにもその歌詞が掲載されている事があるが、歌には曲節があり、且つわらべうたには子供の遊びと共に歌われる事が多いので録音だけでなく映像としても保存する必要性があり、テレビ飯能の協力を得て録画し、そのビデオテープを市内の小中学校、及び公民館等に寄贈した。従って郷土史研究会の例会でもこのビデオテープを活用することができた。

現在、子供の歌は童謡と称されているが、この漢字の童謡に訓読みの振り仮名をつけられ童謡となる。けれども歌わらべうたという語句は江戸期に歌われた子供の歌を称しており、当然の事ながらその作詞者も作曲者も不明であり、子供達の遊びの中から自然発生のに生まれた歌という事ができる。現在は音楽著作権も確立されているので、作者不詳という事はほとんど無い。

私はこの調査に当って、飯能地方という狭い範囲で歌われているわらべうたが伝承されていたのではないかと考えた。それは存在せず、江戸時代に口から口へ伝えられて、箱根の山を越えるか越えないかの相違は有つたにせよ、広い範囲に伝達

されているのを知った。現在のようにはマスメディアの発達していない時代ではあっても、歌というものは業外広範囲に拡まっていた。もちろん、峠を越え、川を渡っての村から村への伝播が地道な方法であるが、その昔、全国をまわった、富山の華売りによって拡められたようであり、その他にはお伊勢参りで全国の人々が伊勢に集っての交流と共に、その途次途次に於いての宿泊先で、歌も凡ゆる地域に伝達されていったようである。

小江戸佐原めぐり

浅見初枝

飯能郷土史研究会の八月例会は昨年に続き県外研修と決まり、見学地は千葉県香取市佐原区となった。

八月二十二日、飯能市郷土館前を七時三十分バスで出発し、参加者は二十一名。佐原の伊能忠敬記念館前の駐車場で、観光ボランティアをしてしている吉田昌司さんが待つてくれた。吉田さんは八十三歳だそうだが姿勢がよく歩みも速く声は大きくハッキリしていて説明も流暢だ。十歳以上若く見えた。第二の人生を地元活性化のためにと自分の趣味を生かし観光ボランティアをしているそうだ。



橋

小江戸佐原の最初の見学は伊能忠敬の記念館。伊能忠敬は、江戸時代後期に(一八〇〇年)一八二一年日本地図を歩測で作ったことで有名だ。忠敬が作った地図と現在の衛星を使っで作成した地図の比較がほとんど差異がないのがみられたり、その時使図したとされる方を計る道具や地図がいずれもレプリカだが本物かと思われるほどの物が展示されていた。

次に伊能忠敬の旧宅へ。記念館から小野川を挟んで向い側にあるのだが、ここに掛けられた橋を十八歩で七〇センチと同じになるとの説明に皆で数を数えながら渡った。忠敬は五十歳で隠居し、江戸へ出

て天文方高橋至時の弟子となり勉強と全国測量を本格的に始めた。それ以前は十七歳で伊能家の婿養子となり家業の醸造業を学ばせさせた佐原の名家、村方後見を務めた。家屋敷は土蔵造りだが質素で店と炊事場裏にある忠敬が増築したといわれている。書院も奥のものであった。地続きの屋敷の狭い引戸の蔵があり、観音開きの扉が普及する以前のもので貴重な土蔵だという。

忠敬の旧宅を含め小野川の兩岸に並ぶ国指定重要伝統的建造物(以下重伝建)の一角にあるそば屋小楢屋本店で昼食。この建物も重伝建で以前は銀行だった。名物の昆布の粉を練り込んだというまっ黒いそばを堪能する。昼食後、重伝建の建物を見学しながら町並みを散策した。現在でもこの家で暮らしているため改築や修理をする場合は表に白木の格子をつける決まりになっているとのことだ。

次に山車会館へ。一階で祭りの様子をビデオで観て二階へ上り、大きなしを同じ高さから見ると高さ七メートル重さ三〇四トンもある山車は、江戸後期から昭和初期にかけて江戸で活躍した人形師達によって佐原の人々が財を投じて作られたもの。現在ではこのような大木偶人形を作る職人はいないといわれ貴重な文化遺産となっている。

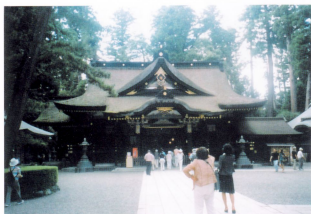
平成十六年二月に佐原の山車行事が佐原囃子とともに国の重要無形民



古い町並み

俗文化財に指定された。山車は全部で十台。伊勢那岐尊、神武天皇、菅原道真、大田道灌、経津主命、天鈿女命、武甕槌命、金持山姥、鯉の大人形が乗っけていて、鷹と鯉は人が中に入れる大きさのものを妻わらを使い、町内全員の協力で作成するのだそう。美しいというより力強い山車である。佐原の人々は祭りという土と血が騒ぐのだと吉田さんは笑っていた。

伊能忠敬は地図をつくるための測量の資金は自費を投じたといわれており、一回に百両かかったそう。十回測量に出ているので千両にもなる祭りの山車といえる。佐原商人の経済力と心意気に底知れぬものを感じる。次にバスに乗り、日本三大厄除大師の一つに数えられている観福寺へ



香取神宮

行く。ここには重要文化財の釈迦如来十一面観世音菩薩、地藏菩薩、華師如来の金銅製懸仏四体が御堂の中ガラスケースに納められていた。私は懸仏を拝観するのは初めてだ。美しかった。同じ境内に伊能家の墓地がある。忠敬は愚師高橋至時の眠る上野の源空寺に埋葬されており、こちらは遺髪等が埋葬されているらしい。最後に香取神宮を参拝して帰路に着いた。見どころ満載の佐原見学であった。五十歳で江戸へ出た伊能忠敬、案内してくれた観光ボランティアの吉田さんの風爽とした姿は、第二の人生の歩み方も勉強させられる一日だった。

郷土はんのう

飯能の山車・屋台
— その構造と来歴 —
小槻成克

飯能市街地にある山車屋台は11台。明治初年から平成19年までと建造年に幅がある。また形式も江戸型入形山車、八王子型入形山車、屋台と様々である。いずれも現在各町のシンボルとして活躍する曳山だ。

◆一丁目の屋台

大正9年、高麗村(現日高市)の岡野柱之助製作。その後、昭和9年に舞台と車台のバランスをよくするために改造、唐破風屋根、廻り舞台付き。飯能で一番重く、「大きさ」を感じさせる屋台である。

◆二丁目の山車

明治4年建造当初は、八王子型一本柱入形山車。砂川村(現立川市)五番組より大正9年に購入。その際車台を新調(作/枯屋三之助・椿三三)正面唐破風の上下をはじめ、40カ所のにぎやかな彫刻が見事。作者は山車彫刻共に現在調査中。

◆三丁目の山車

明治期に多摩地区で建造され、その後三丁目で曳かれるようになった山車。二丁目同様八王子型一本柱入形山車で加藤清正像が乗っていた。舞台前方の唐獅子の彫り物は三丁目地区の輪かんざしを流用したもの。

◆河原町の山車

明治37年、静岡市内より購入。三重高欄・欄間仕立て・四ツ車という江戸

型山車の特徴をほぼ完全に残す。入形はスサノオノミコト、上下段の幕は素尊の八岐大蛇退治話語に因んだ図柄の刺繍で華やかさをそそる。

◆宮本町の屋台

一丁目の山車を作った棟梁岡野柱之助が大正14年に製作した廻り舞台付き屋台。

◆原町の山車

明治15年建造の四重高欄・欄間仕立ての江戸型山車を昭和55年に轆子台を入母屋造り屋根に改造。

◆前田の山車

川越市笠縫の旧家より彫刻を購入、これを主に昭和22年、地元元の棟梁が三重高欄・唐破風屋根付きの轆子台、廻り舞台で製作。入間市野田の山車の図面を参考にしたといわれ「屋台山車」と呼ぶ。入形はなく、諫口鳥が飾られている。

◆柳原の屋台

昭和22年、町内の材木商提供の材料を参考に、一丁目・前田の山車の様式を参考に、当時の棟梁荒木文吉・島田仁三らが建造した屋台。平成に入り大規模な改修を行い、現在の形になる。

◆中山の屋台

昭和63年、本橋初夫の設計をもと

に中山大工組合の手により製作された廻り舞台・四ツ車の屋台(彫刻・南部座一)。

◆双柳の屋台

平成3年に造られた白木造りの屋台型で富士県井波で製作された。



二丁目山車
(市指定有形民俗文化財)

河原町山車
(市指定有形民俗文化財)



飯能まつり出場の山車屋台では唯一車輪隠しの腰幕がなく、腰板を見ている。また、後部両側に双柳の地名由来の彫り物がほどこされている。

◆本郷の屋台

平成20年度飯能まつりに初登場した屋台。前柱、脇障子、持ち送り、鬼板、懸魚などに彫刻が付く。

私が体験した
「昭和初期の飯能市街地」

加藤義雄

昭和初期は長男以外は口減らしのため年季奉公に出され小僧になった。小僧の休みは盆と正月だけで、住み込みで一年中朝から晩まで働きその中で仕事を覚えた。嫁も姑から厳しく家風を仕込まれた。嫁れて実家に帰れるのは小僧と同様盆と正月だけであった。正月の休みは小正月と言われ一月十五日であった。

当時の服装は和服が多かったが、子供と男は次第に洋服を着るようになっていった。小僧の仕事者はシャツに股引・半纏、職人は腹掛・半纏・股引・鉢巻であった。頭髪は男はほとんど丸坊主で職人旦那衆は角刈り、先生、医者、長髪であった。女は鬘をゆっていたがだんだん少なくなった。

お祭りは九月六・七日に行われたが、山車を毎年曳いたのは一丁目と原町



母と娘達の記念撮影(昭和4(1929)年)

だけで、獅子舞が盛大であった。傘まんどろが建てられ近隣からも大勢の見物人がやって来た。昭和天皇の御大典と紀元一六〇〇年祝賀のお祭りは全町内七台の山車が曳き廻され盛大であった。

当時の小学校は尋常高等小学校で、校庭の西側に二階建の高等科の校舎があった。小学校の校舎は二棟あり皆平屋であったが昭和十年に一番古かった南棟だけが二階建に建替えられ新しくなった。先生は威厳があった。背広にネクタイで、和服の女の先生は何時も袴をはいていた。昭和十二年支那事変勃発まではのんびりく



大通り商店街(昭和初期)

らしていたが、その後奉安殿が出来、生徒は校門で最敬礼するようになった。小学校で一番つらかったのは暖房がなく寒かったことである。進学状況は高等科に入る者が七割、中学進学が二割、就職が一割であった。

当時の町の道路はお粗末で、川寺阿須方面へ行く道は、春日通りを南進し久下福荷前で左折し、線路に沿って東に進み駅舎のとこから斜めに川寺へ向う砂利道であった。また中山へ行く道は飯能駅から現在の福田歯医者まで北進するが、その先は細い畦道になるため、左折し、八幡様の角を右折し踏切を渡った。今の飯能駅から一直線の太い道路は戦後出来たものである。

中央通りは東飯能駅が出来たので開発が進められ、広小路の突き当たりであった飯能銀行が昭和十年頃にとりこわされ完成したが、道幅から広いだけで商店はほとんどなかった。

当時の飯能市街地の人家は吾野線の内側だけで、線路の内側も前田の玉宝寺と原町の広渡寺の北はすべて高であった。飯能駅前でさえ今の飯能医院周辺は桑畑であった。当時の中心市街地は大通り商店街であった。蔵作りの買継屋、役屋、染屋、呉服屋、足袋屋、下駄、草履、傘屋が軒を連ねる。高麗横丁も吾野方面からの客を迎える立派な商店街であった。

銀座通りは当時出口通りと言われ



飯能市街地(昭和8年頃)

ていたが、昭和初期に急に発展し活気が溢れていた。観音寺裏から高麗横丁へ出て田井上酒造から明和堂の道を通り八幡様前田方面へぬける横も、織物屋、酒屋、呉服屋、郵便局、買継屋、銀行等があり、現在より立派であった。

大通りの南裏の二・三丁目分は婦美町と呼ばれ、飲み屋、料亭、芸者屋が薙ぎ、男の天国であった。当時は織物屋と材木屋が隆盛で、機屋が町のあちこちにあり、材木屋は飯能駅前を占有していた。飯能は正に織物と材木の街であった。

しかし当時盛大であった買継屋、足袋屋、下駄屋、肥料屋、荒物屋は現在一軒もない。呉服屋、穀屋も昔日の面影がなく、機屋、材木屋は市街地から全く姿を消した。

以上、昭和初期の飯能市街地の様相について述べて来たが、雇用関係も主従関係も風俗習慣も凡て変り、教育、学校、お祭りも興った。道路、商店街の変貌、業種の興亡は驚きの外はない。八十歳の歳月の重みを感じたり感じる次第である。

『大太平洋横断・米本土を
目指した「気球」の話』

新井五助

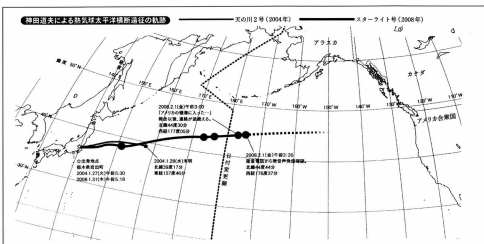
「気球」の歴史は飛行機より遙かに古い。百年以上も遡る。今回は米本土横断計画の気球と単独飛行に挑戦した冒険家の事にふれてみる事にする。

国王ルイ十六世、マリイアントワネットを初め大群衆のバリ上空に浮かんだモンゴルフェアの熱気球公開飛行は、一七八三年初冬の事、続いてシャルルの水素気球も成功している。その後の気球はヨーロッパ各地の戦争にまた空の観光ヒーローと活躍。

日本でも西南戦争、さらに日露戦争では旅順攻撃時の偵察飛行が有名である。そして明治四十二年勅令による「臨時気球研究会」の発足、徳川、日野委員の独仏留学、代々木初飛行、所沢飛行場が日本第一号となった事は衆知の事がある。前後するが気球に遅れた飛行機は、二十世紀に入り一九〇三年十二月、米ノース

カロライナ海岸でのライト兄弟の初飛行からヨーロッパの空へさらに世界へと空の主役となり我が国ではさきの気球研究会も飛行機の時代、気球は飛行機の活躍を含めて影を薄くしたと言える。

①「ふ号」風船爆弾米本土爆撃の記録
昭和六年満州事変、日本の大陸進出が叫ばれ日ソ間の陰悪な空気の、中



高層気象の研究成果として冬季上空約一万メートルの強い偏西風の確認、これに注目した陸軍部内で風船応用の爆撃、細菌攻撃がとり上げられる。そして昭和八年、「国産科学工業」近藤所長(陸士時代後の荒木貞夫大臣と同期親交あり)と和紙問屋小津商店、東京に最も近い小川町和紙組合による「ふ号」作戦が進められる。この構想よっての和紙製造業者の大動員、戦時下各地女子学生の勤労動員、和紙と蒔鞠による巨大風船製造が行われた。

気球用和紙生産枚数(推定、昭十〇)
愛媛四〇七万枚 鳥取五三万枚
高知五九一万枚 埼玉五七万枚
岐阜三四二万枚 石川二三万枚
福岡一〇二万枚 合計十六百万枚

これは気球にして五千個以上、十一月段階で一萬八千個分の完成となる計算となる。こうして各地の工場で作られた気球は厳しい検査を通った後、太平洋横断飛行の各装備、爆弾を積みこみ発射基地(茨城、福島、海岸)で好適気象確認、水素ガス充填打上げとなった。その数一万数千個と言われるが、米本土での到達数は次の数とされ山林火災その他緊急の攻撃兵器、しかもその製法不明、特に蒔鞠糊張り加工は全く解明されなかつたと言われる。

到達個数
オレゴン州 五四個
モントナ州 三二個
アイダホ州 一二個
サウスダコタ州 九個
ネバダ州 七個

ワシントン州 二九個
カリフォルニア 二八個

その他各地、合計すると米合衆国本土二二一、一〇三、九四四個、アラソカ三八、メキシコ三、ハワイ等数個との報告がある。大戦末期のこの「ふ号」作戦はこうして終わる事になったが、このための全国の大動員労働、特に女子学生の奉仕活動は小川町その他全国に及び、飯能でも下請工場の存在云々とも聞く。その詳細はや、不明のままである。

②単独・太平洋横断で米本土を目指す気球冒険家神田道夫氏(川島町職員)の記録

神田氏は高校生時代のゴムボート川下り、秩父「荒川下り」を始めてから空への気球冒険に転身、余暇と私財を投じて日本本土横断、富士山越え、中国からの西太平洋横断等に挑戦、実績を重ねた後海外へ、ヨーロッパ、アラソカ、ヒマラヤアンナンパルナ越え、豪大陸での距離記録さらにカナダへと高度、滞空等々に成果を納め植村直己冒険賞も受けるに至つた。

そして米本土を目指す太平洋横断を計画、同乗パイロットとして石川氏と訓練を重ねて、二〇〇四年、一月二十七日栃木県生、漂流するが、翌日には事故発生、漂流するが貨物船に救助される事により生還することができた。この経験をもとにさらに計画を進めた米、前回より遙かに大型の気球(救助された船名、スターライト号)を作製して二〇〇一年一月三十一日未明、単独飛行決行となった。

そして翌朝寒時、(高度五千三百m、時速一三六km、進行方向七〇)、北緯44、西経177)の連絡を最後にその後は全く不明、各方面の捜索もむなしと川島町役場でも退職扱いとする事となった。

神田氏は所沢の記念館にも講師として参加、交流もあり心残りではあるが今は冥福を祈るのみである。なお参考として太平洋横断ルート図概略を付す

参考文献

- 一、風船爆弾純国産兵器「ふ号」の記録 吉野興一著(毎日新聞社)
- 二、最後の冒険家 石川直樹著(集英社)
- 三、航空ギネスブック (イカロス出版)
- 四、和紙のふるさと (埼玉伝統工業会館)

〔随筆・お正月〕

桐の下駄

大野悦子

学校が冬休みに入って「もういっつ寝るとお正月……」の歌が幼い胸に去来するころになると、入間川で下駄屋を営んでいる遠縁のおじさんが大きな風呂敷包みも自転車に付けた我が家に来る。

父母から始まり兄二人と姉妹五人の正月用の新しい下駄が届けられる。小学生までは赤い塗り下駄だった。

塗り下駄の場合は模様でそれぞれの区別がついていたし名前には裏に書いてあった。桐の下駄には据えらるる鼻緒の色で誰のそれのとは決まってくる。家の周りで履くぶんには自分達の鼻緒で区別がつくが、よそへ履いて行った場合間違えないように、桐の下駄には総てわが家の苗字の焼印が押される。

お正月までに父が下駄をずらりと縁側に入れて並べ、起こした炭火に鉄の印を炙れ赤赤になった焼印を押ししていくのだが、桐の白い不肌にも「じゅっ」という音は子供心にちよっと下駄が可哀想だったのを覚えている。続いて新しい手拭にもやはりそれぞれの名前が毛筆で書かれる。父は新しく物を下ろすときには決まって「名前を入れたか？」が口癖だった。大勢の子供に混乱がないようにと、それぞれ物の持ち物に責任を持たせるためだったんだらうと今には思っている。元旦、目覚めると床の間の部屋に新しい下駄の上に手拭、その上にお年玉のし袋が置いてあった。ずらりと兄か姉に並んでいたのは数が多くだけに兎に先景としての目に残っている。

三が日は朝風呂の習慣だったから、脱衣所につながる廊下に竹ざおが有り、風呂上りの真新しい手拭がやはり上から順に並ぶのも賑やかで幸せなところであつた。

戦前のもだあまり靴が普及していなかった時代の、父母の元にみな子供が揃っていたころの懐かしい思い出である。

〔随筆〕

白いかっぱう着

田嶋和子

私がかつばう着、汚れが目立ちにくい地味なかつばう着姿で働いていた母。お正月は着物に着替える。袖やウールなど紫色を好んだ、ある年紫色が際立つ模様様の着物が、真つ白いかっぱう着を着て母が台所に立っていた。髪にも櫛が通っている。一年中でいちばんきれいに見えた。

子どももお正月が楽しみだったのは、食べ物はたっぷりではなく、ちよっぴり垢抜けた母の姿にもよろこびを感じていたようだ。

母は数枚のかっぱう着をタンスに入れてくれた。いつ、どこで求めたのかわからなかったが「所帯を持つと必要になるから、何枚いってもいいんだよ」と。

やがて新生活がスタートした。お正月は母のように着物がかつばう着を着た。そんなあこがれを胸に秘めていた。二人で迎える初めての元旦はまもなく訪れた。

短期間の花嫁修業で縫った袷に袖を通したのが、半月後に出産予定のおなかになっていった。ぽっこりつき出たおなかを、前身頃で包みたいと思つたが、どのようにしても前がはだけてしまふ。うまく着られない。あきらめて妊婦服の上にかっぱう着のスタイルになる。

鏡を覗くと主婦の顔が写つた。うれしき、恥ずかしさが入り混じった氣持ちで、新米主婦はお雑煮の味つけに苦心していたのだ。

何年経ってもお雑煮を食べると、重いおなかを抱えた新米主婦の光景が浮かんでくる。

最近洋服に合うかつばう着が主流になっていく。白地はあまり見かけなくなつたが、着物には白が似合う。身なりを整えたお正月の母が私は好きだった。ずつとずつとお正月が経ってほしかった。

〔随筆〕

家族で百人一首

吉田敏子

昭和30年代の私が小学生の頃、ふだんは忙しい両親も、お正月には子ども達と遊んでくれた。百人一首は絵札を読み字札を拾う。父は読んで父が節を付けて読んだ。父は読んでからでもすぐ見つけた。実は地域の男性だけの「かるた大会」に入っていて、毎年お正月にはたたび百人一首をやっていたのだ。母も若い頃青年団でよくやったので、上の句を少し読んだだけで下の句がわかるという上の句「あ」で始まる下の句は何枚あるという裏技も知っていた。

もちろん家族でやる時は大人は本氣でやらず、子ども達にそつと教え取らしてくれた。源平のと言つて、二

竹寺の春



組に分かれ、相手の札を取ったら自分の札を一枚あげて、最後に取り札が早くなくなった組が勝ちというのでもやった。弟や妹は、まだ札がよく拾えないのですぐあきて、違うのをやろうとせがむ。

その一つは、トランプの「神経衰弱」と同じで、バラバラに裏返した除札を二枚選んで取る。男と男、姐と姐、坊さんと坊さんだったら当たりでその二枚をもらえる。

もう一つは「坊主めくり」だ。除札を裏返して重ねて置き、順に一枚ずつ取っていく。坊さんが出ると持っている札を全部没収され、姐が出るとそれがもらえる。最後に持っている札が多いと勝つ。これは小さい子

でもでき、勝ち負けは全くの偶然で決まる。

何回かやるうちに誰かがわざと姐や坊さんだけを続けて入れておいたりして、思わぬ人が勝つたり、全員ゼロだったり、一人に全部札がいつてしまいうどん返しがあったりして大笑いとなる。どう仕組んだらおもしろいかを考えるのもまた楽しかった。

そんな遊びをして来た私達四人姉弟は、30年後にはそれぞれ家族で百人一首を楽しんできた。お正月には次は今0歳、二歳の孫たちがもう少し大きくなったら一緒に遊びたいものだ。

飯能郷土史研究会の活動

◎平成二十年度事業報告

▽総会 四月二十日(日)

講演会

「高麗郡建郡三百年と高麗氏」

講師 高麗文康氏

(高麗神社宮司)

▽例会

●六月二十二日(日)

「飯能地方のわらべうた」

講師 深堀道義氏(作曲家)

●八月二十二日(金)

千葉県佐原市見学会

案内 坂口和子氏

●十月十八日(土)

岩井堂観音見学会

案内 入子助蔵氏

(埼玉県郷土史研究会会員・東京在住)

●十月

特展「名栗の歴史」

郷土館事業に協賛

●十二月二十日(土)

「飯能市街地の山車・屋台」

―その構造と来歴―

講師 小槻成克氏

(飯能市文化財保護審議委員)

●平成二十一年二月二十一日(土)

私が体験した昭和初期の飯能市街地

講師 加藤義雄氏

(飯能郷土史研究会理事)

●三月三十日

郷土はんのう二十九号発行

◎平成二十一年度事業計画

▽総会 四月二十五日(土)

講演会「家紋の歴史」

講師 高澤 等氏

(家紋・歴史研究家(日本家紋研究会副会長・家紋研究協議会会長)

▽例会

●六月二十一日(日)

「日本文化の基層を尋ねて」

講師 山岸敬司氏

●八月三十日(日)

名栗地域の見学

●十月

特展「縄文時代の飯能」

郷土館事業に協賛

●十二月十九日(土)

「飯能の仏像」

講師 井上峰次

(飯能郷土史研究会顧問)

●平成二十二年二月二十日(土)

昭和年代飯能の経済事情

講師 加藤義雄

●三月三十一日

郷土はんのう三十号

郷土はんのう 第二十九号

発行日

平成二十一年三月三十一日

発行所 飯能郷土史研究会

〒357-0121 飯能市中藤上郷四一三

(岸道生方)

電話九七七一〇六五四

題字 大野邦弘

印刷所 (有)ビイ・ユースフル